

世界を幸せにする「緑化」 成功への秘訣

日時:2022年11月26日(土)14:00~16:00
会場:さいたまスーパーアリーナ4階
(TOIRO スペース4)

プログラム

14:00	開会 コメンテーター紹介 開催趣旨説明 —東京大学名誉教授 太田猛彦氏
14:15	オイスカについて ウズベキスタンについて —公益財団法人オイスカ 海外事業部調査研究担当部長 長宏行
14:25	内モンゴルでの事例とアラル海での取り組み —OISCA College LTD. 富樫智氏
15:05	太田氏・富樫氏・長 3名によるトーク&質疑応答 ・社会と生活に密着したオイスカの緑化の特長 ・住民を幸せにする各国の緑化の事例 など
15:55	閉会挨拶 —公益財団法人オイスカ 専務理事 永石安明
16:00	閉会

公益財団法人オイスカ

ウズベキスタン沙漠化防止プロジェクト



●主旨

人為的な伐採、自然災害による消失など、世界の森林は荒廃の一途を辿っています。タイやインドネシアの消失したマングローブ林、フィリピンのはげ山、内モンゴルの拡大する沙漠、東日本大震災で壊滅した海岸林。オイスカは、こうした地域で10年、20年という長い年月にわたり活動を続けてきました。これらの持続可能な取り組みのカギは、「地域住民」との向き合い方にあります。オイスカは、今後10年の一大プロジェクトとして、20世紀最大の環境破壊と言われるウズベキスタンのアラル海で4万ヘクタールの沙漠緑化に挑んでいます。

本イベントでは、ウズベキスタンのプロジェクトを例に、SDGsの本道を貫く「オイスカの緑化」の神髄を明らかにします。



●特別会員 (年額1口) 法人/10万円 個人/5万円

●維持会員 (年額1口) 法人/4万円 個人/2万円

●マンスリーサポーター 個人/月々2,000円~

※ 特別会員と維持会員には会員としての差異はなく、口数とともに自由にお選びください。
※ 会員、マンスリーサポーターの皆さまには、広報誌「OISCA」(年6回)をお届けします。
※ 新入会年度は、入会月によって納入金額が異なります。

●「子供の森」計画支援金(年額1口) 法人・個人/5,000円

※ 海外の支援地域の活動案内(年1回)やニュースレター(年2回)をお届けします。
※ 子どもたちからのグリーティングカード(年1回)が届きます。

ウェブからも支援のお申し込みができます ▶<https://oisca.org/individual/>

●相続・遺贈・お香典でのご寄附

生涯で築かれた大事な財産を、「住み続けられる未来」の実現のために、役立てていただけませんか?
「相続や遺贈、お香典などによるご寄附」のご相談をお受けしています。

お問い合わせや資料請求のお申し込みは



〒168-0063 東京都杉並区和泉2-17-5
Tel (03)3322-5161
Fax (03)3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
<https://oisca.org>

What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立された国際NGOです。現在、41の国と地域にネットワークを持って活動しています。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では、農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

地域住民と共に緑化への輪を作り出したプロジェクト例

宮城県名取市

住民の決意で広がった協働の輪

海岸林再生プロジェクト



▲再生した海岸林のほぼ中央地点上空から南側の植栽地を撮影（2020年9月）



2011年の東日本大震災による大きな津波の被害。復興に向け、オイスカは何かできるのか。考えた結論が「海岸林の再生」でした。ニーズを探った結果、宮城県名取市で約100haのプロジェクトを立ち上げることに。

宮城県の海岸林の被害は、全被災面積3,659haの過半を占め、木々が根こそぎ倒される壊滅的なものでした。宮城県南部沿岸域の海岸林は400年前から代々守られ、その後背地は一大農産地です。「必ず自分たちの海岸林を取り戻す！」という地元農業従事者の強い意志がプロジェクトに。オイスカのコーディネートで、自治体や地元森林組合、1万人を超えるボランティアが参加。大きな「協働の輪」で、クロマツの育苗から植栽、育林までの一貫作業が可能となり、被災農家の暮らしの支えとなる雇用を生み出しました。

プロジェクトは現在、クロマツの保育・管理が中心の第二次10ヵ年計画に入っています。

タイ・ラノーン県

森の再生が意識改革の波及効果を生む

マングローブ植林プロジェクト



マングローブ林は、さまざまな恵みをもたらしてくれる。2021年には、マングローブの葉を使ったお茶の生産、石鹸づくりなどによる住民の生計向上の取り組みもスタートした



ラノーンの人々にとってマングローブ林は、自分たちを津波の被害から守り、カニやエビなどの恵みをもたらす大切な資源です。ところが、一時の収入増加を求めたスズの採掘や薪炭材としての伐採などにより、マングローブ林が破壊されてしまいました。

オイスカは1999年に同地で活動を始め、現在までに約2,000haのマングローブを植林。地域住民の意識改革に取り組んだ結果、森の再生が自分たちの収入向上や生活改善につながることに気づき、主体的に持続可能な森林保全に取り組むように。この成果をタイ政府からも高く評価され、プロジェクトは数々の賞を受賞。このマングローブ林を世界遺産として登録する運動も始まっています。オイスカもこの形をモデルケースとして、北部タイや東北タイでの展開も試みています。

インドネシア

観光資源・環境教育の場としても期待

マングローブ植林プロジェクト



<中部ジャワ州パティ県>2012~14年にかけて植林したマングローブ林。エコツーリズムの拠点にするため、遊歩道を建設。遊歩道内には、樹種などを説明する看板も設置してある（2019年10月）

インドネシアのマングローブ林は世界最大の3百万ha。それが近年、急速に消失。主な原因は魚やエビの養殖池への転換です。マングローブの茂る海岸は、養殖池に最適な土壌環境でもあり破壊を招きました。また、海岸の浸食で雨季の高波が激しく、大潮が重なると居住地まで押し寄せ被害が拡大。中部ジャワ州の沿岸は特にひどく、土壌が削られ、時にマングローブの成木さえ根こそぎ倒れる状況でした。対策として2020年、コンクリート製の防波堤を導入。内側の村は守られ、居住地と防波堤の間は植林が可能になりました。プロジェクトは25年が経過し、約3,300haの植林を実現しています。

また、同州パティ県ではマングローブ林を活用したエコツーリズムも実施。遊歩道の建設も進んでおり、観光資源や環境教育の場としての期待もますます高まっています。

フィリピン

ふるさとの緑を取り戻す！ ハゲ山を生態系豊かな森に

ヌエバビスカヤ植林プロジェクト



▲水源林としての機能を回復した森林は、ふもとの村に豊富な水をもたらし、それまで1回だった米づくりが年に3回できるようになった（2020年1月）
▶地元の子どもの笑顔も眩しい



ヌエバビスカヤでの活動は今年で30周年です。戦後の伐採や地域住民による家畜放牧、頻発する山火事などが、かつての熱帯雨林を破壊。この惨状を憂い、森の再生に立ち上がったのが同地域に住むオイスカの訪日研修生OBたちです。これに日本のオイスカ会員の有志が呼応し、1993年から本格的な植林事業が開始されました。しかし長年ハゲ山であった土地はやせ、十分に成長できない樹種は多くが枯死。それでも生き残った早成樹の落ち葉が少しずつ土壌を豊かにし、2019年の調査では動植物の絶滅危惧種や固有種を含む在来種87種が確認されました。

周囲のハゲ山で起こる自然発火や不用意な人為的火災による延焼といった課題は残るも、以前と違うのは地元住民の理解と参加があること。皆で防火帯や家畜への防護柵を設置するなど、約600haの多様な豊かな森の維持管理に努めています。